

3. 商店街の居場所の機能がもたらす住民主体の地域づくり

松本市地域づくりインターン第1期生・中央地区担当 濱 由佳子

1. 概要

1-1 背景

1) とびきり居心地よい第三の居場所「サードプレイス」を失った第二次世界大戦後の社会

アメリカは郊外の国になった(略)第二次世界大戦後のアメリカには、歩いて行くところがなく、人の集まる場がない。好ましいとされ、いたるところで実行された都市開発の様式は、「歩くこと」と「話すこと」を嫌う。人は、歩くことによって自分の住む地域の一部になり、他者と出会い、自分たちの近隣住区の管理人になるのに。話すことによって互いを理解し、共通の関心事を見出したり作り出したりして、コミュニティと民主主義に不可欠な集団の能力を自覚するのに。この観点、すなわち私たちが成し遂げた郊外開発の恐ろしい代償というこの感覚から、私たちが読み書きするものの大半は方向性を得ている。(『サードプレイスコミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』より抜粋)

アメリカ同様日本社会も、第二次世界大戦後である昭和後期から敗戦後の復興を遂げようと、商業主義一辺倒である都市再生に取り組み、より住みやすい場所を求め郊外開発を進めた。時代が平成へと移り変わると、産業化が進むとともに職住分離が起き、あらゆる人を受け入れる地元密着の「とびきり居心地よい場所」が失われた。(『サードプレイスコミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』引用)

近隣住民を団結させる機能である「郵便局」や「ドラッグストア」は中心部にあり、あらゆる人が利用し、誰もがみんな知り合いであるような雰囲気生まれる。(略)さまざまな問題や危機に直面したとき彼らがどんな貢献をできるかを知っていることであり、彼らにどんな感情を抱いているかにかかわらず、近隣に住む誰とでも仲良くやってゆくすべを身に着けることである。「とびきり居心地よい場所」はいわば「ミキサー」なのだ。『サードプレイスコミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』引用)

「とびきり居心地よい場所」の本領であるコミュニティ構築機能(略)たいていの場合、わたしはそのような場所を(第一の家、第二の職場に続く)

「第三の場所」(サードプレイス)と称するが、それらはインフォーマルな公共の集いの場だ。こうした場所は、あらゆる人を受け入れて地元密着であるかぎりにおいて、もっとコミュニティのためになる。

『サードプレイスコミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』17項より抜粋

しかしながら、現代社会においてその「ミキサー」の役割を担うサードプレイスが奪われた。長い歴史の中で多くの役割を担ってきた「ミキサー」を失った現代に生きる私たちは、多くの弊害を抱えていると考えられる。

2) サードプレイスが失われた現代社会における弊害

「ミキサー」の役割を担っていたサードプレイスを失った現代社会において、現代に生きる私たちは様々な弊害から多くの代償を得た。ここでは『サードプレイスコミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』を参考に、サードプレイスを失った現代社会における弊害を4点に分けて考えることとする。

① 高齢者の疎外

サードプレイスは年配者のためにもなる。残念ながら、多くの高齢退職者は、どこかの「高齢者向けコミュニティ」を終の棲家にするのを望ましいと思っている。彼らが働いたり子育てしたりしたその地域が、彼らに提供するものも、彼らを近隣住民やコミュニティと結びつけておく手段も、ほとんど持っていないとは嘆かわしい。(『サードプレイスコミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』より抜粋)

地域で生活を送るためには、商売を成り立たせ資金を得なければならない。しかし大資本化が進んだ現代では、昭和のように小さな商店だけでは生計を成り立たせることは困難となる。若い世代は

仕事を求め、他の地域へと流出する。高齢者はサードプレイスと生活する人々が失われた地域に、取り残される。長い年月をかけ社会を担ってきた世代にとっては、あまりにも残酷である。

②困難な子育て環境

サードプレイスの機能のなかで最も崇高でありながら、もはやどこでもほとんど実現されなくなったのは、若者と大人を一緒にくつろがせ、楽しませる機能だ。(中略)かつて子育てが今より容易だったのは、子供たちを知っていて、見守るだけでなく、いやな顔ひとつせず周囲で遊ばせてくれた近所の人々に、親が大いに助けられていたからだ。古い世代と若い世代がどんなふうにお互いをからかい、おだて、たしなめ、楽しませたかは、相手からどんな教訓が得られ、どんな手本が示され、どんな地元の人物が賞賛されたかと同じように、今やほとんど忘却の彼方にある。(『サードプレイスコミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』より抜粋)

サードプレイスが奪われたことにより現代社会は、子育てをする親にとっても、子供にとっても生きにくい社会に変化してしまったのかもしれない。子供に関わる痛ましい事件や不登校問題、成人の社会的な自立に関わる問題等、挙げ始めればきりがない様々な問題が起こることは、かつては当たり前であった多くの大人が子供を育てる環境が失われた現代社会の幼少期における大人との関わりの浅さが招いたものではないだろうか。子供が大人になりきれないまま、身体だけが大きくなった精神が未熟なヒトの集団社会には計り知れない問題が見え隠れしている。

③ストレス社会の誕生

インフォーマルな公共生活がないために、アメリカ人は、他の文化で大きな効果を上げているあのストレス解消手段を得ることができない。その手段は、ストレスを生み出す諸々の特徴と同じくいたやすく都市環境に組み込めるのに、わたしたちはその事実気づいていないようだ。(中略)あいにく世論は「ストレスの原因は社会にあるが、その治療は個人で対処するもの」という見解に傾いている。

(『サードプレイスコミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』より抜粋)

精神が未熟なまま身体だけが大きくなったヒトは、社会生活において困難が降りかかったときの対応方法を知らない。子供の時に小さなキズを受けた

とき周りの大人から治し方、癒し方、かわし方を教わる。しかし、現代社会において子供の時に大人からそうしたことを教わることのなかったヒトは、取り返しのつかないキズを受け周囲に頼る人もなく社会に戻るまで相当の時間を要する。ストレスというキズは、現代の社会環境が招いたことであるのに治療は個人の責任とは、あまりにも皮肉なものである。

④地域づくりにおいて必要な人との関係づくり

すぐれた文明は、すぐれた都市と同様、一つの共通した特徴をそなえている。その内部で生成し、その成長と洗練に欠かせないのが、人のよく集まる気楽な公共の場だ。こうした公共の場は、市民の日常生活に組み込まれるばかりか都市景観の一部にもなり、決まって都市のイメージを特徴づけるようになる。(略)そんな環境を与えられずにいる人々は、群衆のただなかにも孤独なままだ。科学技術の進歩が社会にもたらす結果として予測できるのはせいぜい、個人と個人の隔たりがますます大きくなることぐらいである(『サードプレイスコミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』33～34頁より抜粋)

国をつくるうえで重要なそれぞれの地域をつくるのはそこに暮らすヒトである。しかし、サードプレイスが失われた地域において関わる場所が失われたことにより隔たりが生まれた。そのことにより、地域をつくるうえにおいて必要な人づくり、関係づくりが断たれ、地域づくりを進めるうえで弊害を生んでいるのではないだろうか。サードプレイスが失われたことにより、それぞれの地域を形作る大切なきっかけも奪われてしまった。

3) 実践検証による居場所の研究

このようにサードプレイスを失ったことにより、現代社会で生活を送る人々は様々な問題を抱えている。しかしながら、今一度かつてのサードプレイスである第三の居場所を創ることで、私たちの抱えている問題を解決できるのではないだろうか。そして、問題を抱えた私たちに現代社会で生活を送るうえで新たな可能性を見出すことができるのではないだろうか。

そうした現代人が現代から未来において生活を送るうえで大切な糧を得るためにここでは、実際に地域においてサードプレイスである第三の居場所を人為的に設置し、実践検証を行う。サードプレイス

である居場所の定義を明らかにしたうえで、どのような機能をもたらすか、またそのうえで、今後の地域づくりにおいて居場所がもたらす可能性を明らかにしようとする。

今回私たちが実践検証の場として取り扱うフィールドは、長野県松本市の中心市街地に位置する中央地区（行政区画における地区単位で16町会を有する）に含まれる上土の松本市下町会館1階「カフェあげつち」を基盤とした中央地区全体とする。

1-2 研究の方法

1)「カフェあげつち」および中央地区での取り組み

松本市の中心市街地を含む中央地区は16町会を有する少子高齢化が進行する地区である。16町会の一つに含まれる上土町にある松本市下町会館は、平成4年に地域住民が行政に働きかけ大正ロマンのまちなみを保存しようと尽力し、曳家と修復工事を行った昭和初期から現存する建造物である。

その1階部分に2015年5月から大正ロマンのまちづくり協議会（上土町会と上土商店街振興組合とが一体となった組織）を主とした地域、松本市、松本大学が連携し、コミュニティカフェ「カフェあげつち」を開設した。これは、子供から高齢者までの全ての世代である誰もが集える憩いの「居場所」を創ることを目的としたもので、住民主体の地域づくりを行うことを最終目標とする。具体的な取り組み内容は以下の通りである。

喫茶運営として週7日間地域ボランティア計5名の女性と常駐スタッフが運営を行った。2016年度は、4月から9月初旬までの半期は月曜日から水曜日までの3日間の10時から16時を地域ボランティアが、木曜から日曜までの4日間の10時から18時を常駐スタッフが担当した。9月中旬から10月中旬までは下町会館改装工事のため休業をした。その後10月下旬から3月までの半期は営業時間を10時から16時に変更をし、月曜日、水曜日、金曜日、日曜日の4日間を地域ボランティアが、残りの3日間を常駐スタッフが担当した。

また、喫茶運営とともに子供や子育て中の世代の居場所づくりを進めるために、駄菓子や玩具を陳列した「駄菓子屋ロマン館」を設けた。

喫茶運営の時間内では関わることのできない人々の居場所を設けようと英会話、抹茶、習字の3つの教室の運営を行った。英会話は月に2回第2と第4木曜の19時より上土町会および松本おかみさん会ほかの地域住民の14名を対象とした。抹茶教

室は、月に1度第1木曜日に19時から上土町会の女性を対象とした。習字教室は、平成28年度5月より新たに開始した講座で、月に1度19時からの教室と課題提出による添削を行い上土町会の10名の女性を対象とした。

また10年以上にわたる上土商店街振興組合と松本大学の関わりにより、若者の学びの場としての役割も担った。平成27年度より継続して行った買い物支援事業「買い物支援ステーション」の野菜市は松本大学の知の拠点事業（COC事業）として毎週1回下町会館横の広場および上土ふれあいホール下の駐車場で16時から2時間ほど松本大学生が地元の野菜および閉店した商店から仕入れた日用品の販売を行った。また、冬季には大雪が降った際松本大学生が上土の雪かきを行った。

カフェあげつちの休業中である10月には中央地区の秋の文化祭「第12回中央地区ふれあい祭り」において地域住民から江戸から昭和の生活用品等を収集し大手公民館の1室に1日限定で展示を行う「まちなかギャラリー」を実施した。11月には松本大学生が1日から2週間にわたり、上土商店街の12軒の商店のショーウィンドーに展示をした。

その他にも中央地区大手公民館の取り組みとして大手公民館長および中央地区センター長により、月に1度行われる酒を飲む会「居酒屋公民館」が上土で開催された。

また、かつて映画館が複数あり映画のまちとして栄えた上土商店街に現存する旧松本電気館である上土シネマの保存と再生に取り組みうと上土振興組合、松本市、松本大学とが連携をした話し合いの場が平成28年10月から月1回設けられた。長年様々な方面から持ち主である松本産産土地組合に働きかけが実を結んだものであり、今年度ようやく保存と再生計画の検討を行う旨の了承を得て執り行われたものである。

2) 事例説明

以上のカフェあげつちおよび中央地区における取り組みを基に、居場所の実践研究を行う。そのために1-2 1) カフェあげつちおよび中央地区での取り組みを目的ごとに3点に分類し、研究を進めることとする。取り組みの分類は以下の通りである。

- 1) カフェでお茶を飲み英会話教室に参加する事例
 - ① 喫茶運営
 - ② 教室運営
- 2) 地域課題を踏まえて生活を支える拠点の事例

- ① 買い物支援事業
- ② 雪かき
- ③ 居酒屋公民館
- ④ まちなかギャラリー
- 3) ちづくりのきっかけとなる事例
 - ① 地域住民のカフェボランティアとしての参加
 - ② 水と緑の景観を考える会
 - ③ 旧松本電気館保存再生プロジェクト

3) 本論文の構成

本論文では、以上の目的ごとの取り組みにおいてそれぞれの取り組みにおけるデータ分析の記載、また具体的事例の記載によるエスノグラフィで実践研究を行う。

そしてそれぞれの事例に当てはまるものに対し、『サードプレイスコミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』を参考文献としたうえで、文献からそれぞれに対応する事例の記載をし、文献研究を行う。

そのうえで事例ごとに、データ分析、エスノグラフィ、文献研究から読み取れたものをもとに考察を行い、結論として居場所の定義を明確にしたうえで居場所の機能がもたらす地域づくりの可能性を明らかにする。

終わりに、今後居場所づくりを進めるうえでの課題を明確にし、展望について考える。

2. 実践研究

2-1 データ分析

以下は、カフェあげつちの運営および中央地区での取り組みにおけるデータである。実践研究のため目的ごと3種類に分類し、データを分析する。

1) カフェでお茶を飲み英会話教室に参加する事例

① カフェあげつち客数

2015年度において常駐スタッフの運営日にカフェあげつちを訪れた客数は以下の通りである。

延べ人数： 3,571人(推計)
 一日当たりの平均客数： 16人(推計)

2016年度において常駐スタッフの運営日にカフェあげつちを訪れた客数は以下の通りである。

延べ人数： 3,092人(推計)
 一日当たりの平均客数： 20人(推計)

これ以降の3) まちづくりのきっかけとなる場の事例の項目において、2015年度および2016年度にお

けるカフェあげつちの営業日数のデータを示すが、そこから分かるように2016年度においては2015年度よりも常駐スタッフの運営日が減少し、地域ボランティアによる運営日が約半分の割合を占めている。しかしながら、常駐スタッフの運営日が20年度よりも2016年度において減少しているにも関わらず、2015年度と2016年度における客数は大幅に差がない。また、データからも分かる通り、一日当たりの平均来客数は2015年度よりも2016年度において増加したことが分かる。

このことから、2015年度から2016年度にかけて徐々に客数を増やししながら人々が喫茶店に足を運ぶことのできる居場所づくりが継続されたことが分かった。

② 教室実施回数

2015年度教室実施回数は以下の通りである。

英会話教室： 14回
 抹茶教室： 6回

2016年度教室実施回数は以下の通りである。

英会話教室： 17回
 抹茶教室： 7回
 筆ペン教室： 10回

以上のデータから2015年度から2016年度にかけて、喫茶営業だけで訪れることのできない人々が足を運ぶことのできる教室の実施が継続されたことが分かる。

③ カフェあげつち2016年度営業収支

カフェあげつち運営における2016年営業収支およびその内訳は以下の通りである。

総売上	1,639,878円
総売上の内訳	
喫茶部の売上:	1,138,396円
駄菓子屋ロマン館における	
駄菓子と玩具の売上:	81,233円
買い物支援ステーションにおける	
売上:	361,615円
ぬくもり喫茶むくの木における売上:	8,130円
よいまちクラブにおける売上	42,364円
生坂赤とんぼ祭りにおける売上	8,140円
総支出:	1,661,228円
総支出の内訳	
喫茶部の支出:	542,136円

駄菓子屋ロマン館における	
駄菓子と玩具の支出:	62,508円
買い物支援ステーションの支出:	339,550円
賄い費:	84,117円
消耗品費:	96,269円
維持費:	319,694円
交際費:	57,994円
大正ロマンのまちづくり協議会:	120,000円
ぬくもり喫茶むくの木の支出:	10,800円
よいまちクラブの支出:	28,160円
総当期利益:	-21,350円

2) 地域課題を踏まえて生活を支える拠点の事例

① 買い物支援ステーションおよび雪かきの実施回数

2015年度における買い物支援ステーションおよび雪かきの実施回数は以下の通りである。

買い物支援ステーション実施回数:	30回
雪かき実施回数:	1回

2016年度における買い物支援ステーションおよび雪かきの実施回数は以下の通りである。

買い物支援ステーション実施回数:	23回
雪かき実施回数:	2回

2015年度に引き続き2016年度においても買い物支援ステーションおよび雪かきの実施が継続された。

② 居酒屋公民館in上土

居酒屋公民館in上土参加者数32名

③ まちなかギャラリー

12回中央地区ふれあい祭りにおいて実施したまちなかギャラリーでは、7名の地区住民から14点の展示品が提供された。

3) まちづくりのきっかけとなる場の事例

① 営業日数

2015年5月1日(金)から2016年3月31日(木)までの初年度における営業日数は以下の通りである。

地域ボランティアによる営業:	77日
学生アルバイトによる営業:	27日
常駐スタッフによる営業:	201日
合計営業日数:	305日
休業日数:	26日

2016年営業日数

2016年4月1日(金)から2016年3月31日(木)までにおける営業日数は以下の通りである。

地域ボランティアによる営業:	162日
----------------	------

常駐スタッフによる営業:	155日
合計営業日数:	317日
休業日数:	49日

1)でも述べたとおり、2015年度に比べ2016年度においては、常駐スタッフによる運営が減少し、地域ボランティアによる運営が増加した。このことから、徐々にではあるがカフェあげつちの運営に地域住民の関わりが以前よりも増したと言える。

2-2 エスノグラフィ

以下は、カフェあげつちおよび中央地区での取り組みにおける具体的事例である。実践研究を行うため、10事例を3種類に分類した。

1) そこに住む人々がほっとできる空間や人とつながる空間の事例

① カフェでお茶を飲むことに関する事例：2015年度に達成

ケース1：日常生活の中で課題を解決

Aさん(60代女性)は夫の看病をしながら飲食店を一人で切り盛りしている。カフェあげつちが開業までは別の喫茶店を利用していたが、2015年4月に閉店をしてしまった。行き場がなくなったAさんは2015年5月から「カフェあげつち」を利用するようになった。夫は入退院を繰り返し、デイサービスを行き来する生活を送っており、看病に関わる問題や課題、生活に関する不安な思いなどを日常的に「カフェあげつち」のスタッフや「カフェあげつち」に足を運ぶ近隣住民に話すようになった。そういった日常的な会話の中から生活に関わる問題や課題解決の糸口を近隣住民の経験や知恵で解決にすることができ、今では精神上的なストレス解消の場、地域の中での新たな人間関係として「カフェあげつち」が新たな居場所になってAさんはほぼ毎日利用するようになった。また、毎週(金)の野菜市では新鮮な野菜を購入し店舗で利用し、日常的な「買い物」と非日常の楽しみ「カフェあげつち」でのお茶を一度に楽しむことがAさんの日課となっている。

(平成27年度地域づくりインターンシップ戦略事業研究論文「地域の居場所づくりから見る地方都市における商店街の新しい役割」とは松本市地域づくりインターン第1期濱由佳子著より引用)

ケース2：常連客であることが何よりも意味を持つ

Bさん(80代女性)は夫を亡くし息子夫婦と同居している。日中は家に一人で過ごす生活である。「カ

「カフェあげつち」が開設してから、夫の看病をし、生活を送る近所のCさん(70代女性)とはほぼ毎日顔を出すようになった。それまではテレビを見て過ごすなど、日常に張り合いがなかったが、「カフェあげつち」に顔を出すと必ず他の近隣住民と顔を合わせることができるようになった。

しかし、Bさんは秋に怪我をし、体調が回復するまで1か月ほど入院生活を送った。それまで、毎日「カフェあげつち」に顔を出すことが日課であったBさんの姿が見えないことを「カフェあげつち」に顔を出す多くの近隣住民が心配するようになった。それから体調が回復したBさんはまた「カフェあげつち」に顔を出すようになった。

日常的に「カフェあげつち」に顔を出すことが日課となっているBさんは、今では「カフェあげつち」や街にとって、いることが当たり前存在である。

(平成27年度地域づくりインターンシップ戦略事業研究論文「地域の居場所づくりから見る地方都市における商店街の新しい役割とは松本市地域づくりインターン第1期演由佳子著より引用)

②教室の参加に関する事例：2015年度に達成 ケース3：教室の開催により多くの地域住民が訪れる居場所に

下町会館カフェあげつちでは、営業終了後に英会話、抹茶、習字教室を開いている。月に1度から2度行われる教室では、営業中にカフェあげつちを訪れることのできない上土を中心とした中心市街地で自らの商店の運営を終えた近隣住民等が参加をする。こうした教室の開催により、普段関わることのできない住民同士の関わりが生まれた。

2016年5月より新たに始まった習字の教室では、毎月検定課題の提出が求められ、講師による添削を行っている。そのため、日中カフェあげつちにあまり顔を出さない地域住民数名や講師も日ごろから習慣としてカフェあげつちを訪れるようになり、喫茶としての運営機能だけでなく多くの地域住民が足を運ぶ居場所としての役割を果たすようになった。

2) 地域課題を踏まえて生活を支える拠点の事例

①買い物支援事業や雪かきを通じて生活を支えた事例：2015年度から2016年実施

ケース4：買い物支援事業を通して生まれた地域住民と学生の関わり

2015年度5月から毎週1回松本大学地の拠点事業(COC事業)により下町会館横の東門の井戸そ

ばと上土ふれあいホールで実施をした買い物支援事業「買い物支援ステーション」の野菜市は、島立、三郷、入山辺、山形村といった松本市内外の地元の野菜や閉店した商店の日用品を松本大学生が販売した。毎週行われる野菜市は、食料品店の閉店や休業により買い物難民となったカフェあげつちの客を中心とした近隣の住民が訪れた。

毎週1度の販売により顔を合わせる近隣の住民と松本大学生は商品の販売だけでなく、回を重ねるごとに顔見知りとなり言葉を交わし始め、次第に地域住民と学生のつながりが地域の中で生まれた。中には、名前を覚え目当ての学生を目掛けて買い物に訪れる地域住民が現れるなど、学生は野菜の販売を通して、地域において人との関わり方や喜び、大切さを学んだようであった。

ケース5：雪かきを通じて地域住民の生活を支えた事例

2016年1月18日に松本市は大雪に見舞われ、下町会館「カフェあげつち」のある上土町も早朝から雪の白さに包まれた。毎週1度の野菜市の実施により地域において住民との関わりが生まれた松本大学の学生の内6名が上土町の雪かきを行った。これは、学生が買い物支援事業の他に野菜の販売を行わない冬季に地域住民の課題を解決できないかと行ったものである。

少子高齢化が進む上土町会に降った大量の雪や凍った氷は、地域住民の大半である高齢者には大掛かりな作業で、一日をかけ雪をかいた学生にはカフェのボランティアスタッフである女性や上土の商店の店主や住民から多くのまかない料理を頂戴した。

②公民館事業「ふれあい健康教室」「居酒屋公民館」にまつわる事例：2016年度実施

ケース6：地域住民が公民館事業を通し自ら新たな居場所づくり

上土町会を含む16町会が属する中央地区のセンターがある大手公民館では、毎月第3金曜日に福祉ひろばにより高齢の男性が健康に過ごせるよう「ふれあい健康教室」が開かれ、その後公民館長と中央地区センター長により高齢の男性も公民館に足を延ばすことができるよう酒を飲む集いの「居酒屋公民館」が開かれている。

2年目に突入したこの取り組みを上土町で実施しようと2016年9月16日(金)に「出張男性ふれあい健

康教室」ならびに「出張居酒屋公民館上土」として下町会館と上土ふれあいホールで開催された。普段公民館を訪れる中央地区の住民が上土の下町会館と上土ふれあいホールに顔を出し、普段上土には集わない人々が新たな居場所で時を過ごした。

このように、地域住民が自ら下町会館の運営の他に公民館の事業を通して居場所づくりに取り組み、より多くの地域住民が関わることでできる環境と関係が生まれた。

③「まちなかギャラリー」に関する事例：2016年実施

ケース7：上土町から中央地区へ広がった取り組み

中央地区のセンターがある大手公民館では、毎年10月に中央地区の地域住民が所属する中央地区ふれあい祭り実行委員会の主催により「中央地区ふれあい祭り」が開催される。地域住民による食べ物の販売や作品の展示、公民館利用団体等の発表などが行われる中、地域づくりインターンの担当として鎌田地区の塚原有香と連携をし、江戸から昭和の生活用品や写真を地域住民から募集した品を展示する「まちなかギャラリー」を行った。2014年度に上土商店街振興組合と松本大学白戸ゼミの連携により、上土商店街の13店舗の店先に上土町会と振興組合の住民から収集した明治から昭和の生活用品や写真を展示し、まちなかを巡ってもらう「大正ロマンギャラリー」を実施した。この取り組みを上土町会の範囲内ではなく、中央地区全体へ広めようと実施したものである。

「まちなかギャラリー」の実施および展示品の募集を中央地区の町会長会議で事前に依頼する際には、これまでの松本大学生および地域づくりインターンとしての取り組みが上土町会および振興組合に限定されてしまっていた現状を踏まえたうえで、上土町会だけでなく中央地区全体から展示品の募集を行い、今後数年をかけ中央地区全体に「大正ロマンギャラリー」同様の取り組みとしてまちを巡ることのできる仕掛けの足掛かりとして、本年度は公民館に1日限定の展示を行うことについて説明し了承を得た。

公民館長やセンター長等の呼びかけにより7名の地区住民から編み笠や矢立といった14点の展示品の提供があり、上土商店街の写真とともに、松本大学向井ゼミの学生が説明書きを作成し展示を行い、当日は60名を超える地域住民が足を運んだ。後日行わ

れたふれあい祭り実行委員会の反省会では、中央地区連合町会長から「来年度も展示品を早くから集め実施してほしい。」との声をもらった。

このように「まちなかギャラリー」の実施により上土町会に限定されていた取り組みが中央地区全体へと広がった。

3) まちづくりのきっかけとなる場の事例

①カフェボランティアに関する事例

ケース8：地域住民がカフェボランティアからまちづくりへの参画

2015年8月より地域住民である3名の70代女性が「カフェあげつち」のボランティアスタッフとして喫茶運営を週に3日間行ってきた。当初は常駐スタッフの手伝いという名目であったが、スタッフとして運営にかかわることがそれぞれの生活における生きがいとなり、2016年11月からは5名の女性が週4日間の運営を担当するようになった。

2016年9月から10月に下町会館の工事により休業をした「カフェあげつち」であったが、10月末からの新たな運営体制を考える際には、これまで喫茶運営に対して自ら主張をすることのなかったボランティアスタッフの2名の女性が、冷蔵庫の置き場や学生との関わり、店舗の運営方法など意見を述べるようになった。また、抹茶教室の講師としても関わりを持つスタッフの女性や大手公民館の事業にも委員として関わりを持つスタッフの女性は、長年上土のまちづくりを率いてきた理事長や町会長、女性部長らがまちの活動を行う際助けが必要となると、「カフェあげつち」に顔を出し、日常生活の中で互いに声を掛け、大人数で毎月の教室や歌を歌う会「よいまちクラブ」を行うようになった。

このように「カフェあげつち」のボランティアスタッフとしての関わりから地域住民自身が「カフェあげつち」の運営を考え、まちづくりに参画するようになった。

②「水と緑の憩いの空間ワークショップ」にまつわる事例

ケース9：カフェあげつち運営から地域づくりへの意欲

松本市役所都市政策課の計画によりお城下町まちづくり推進協議会の主催として「水と緑の憩いの空間ワークショップ」が2016年10月30日から12月12日まで全5回により行われた。これは、平成6年3月に発足した緑町、みどり会、ナワテ通り商業協同組合、縄手商業界、上土町、上土商店街振興組合から構

成される「お城下町まちづくり推進協議会」の心地よい空間を提案しようと、都市計画家、建築家、都市デザイン担当の指導を受けながら、地域住民20名ほどが、下町会館、市営住宅上土団地、縄手通り四柱神社前の3カ所の現地確認を基にし、グループワークを行った。

このうち下町会館について4、5名で考えたグループでは、実際に良いところ、改善したほうが良いところについて意見を出し合い、オープンカフェとして利用できるよう日よけや木陰、新たにテーブルやベンチを設けたほうが良いのではないかという意見が聞かれた。また、機能面として絵葉書の販売を通して赤いポストの利用を観光客向けに促進してはどうか、下町会館の階段の壁を利用し展示を行ってはどうかという意見が出された。

このワークショップに参加したことで、普段関わることのない他の地域住民から新たな意見を交わした下町会館を管理する男性は、「カフェあげつち」の運営からまた新たな地域づくりへの意欲を燃やしていた。

③旧松本電気館保存と再生に関わる事例

ケース10：旧松本電気館を中心とした新たな住民主体の地域づくりの動き始動

松本の中心市街地はかつて映画館が多数集まる場所で、上土商店街にも「開明座」「松本電気館」といった映画館があり、映画の街として栄えたが時代の流れとともに閉館へと追い込まれる。そのうち建物が上土商店街に唯一現存する旧「松本電気館」を復活させようと、上土商店街振興組合の理事たちは長年土地の所有者である「株式会社産土地組合」へ働きかけてきたが10数年間許可が下りることはなかった。

しかし、2016年8月に上土商店街振興組合が松本大学と「旧松本電気館」の再生および活用について考える旨を株式会社産土地組合から了承を得た。このことにより、11月1日から1月まで毎月1回上土商店街振興組合理事4名、松本大学教員2名、松本市役所職員5名、地域づくりインターン1名の参加により「松本電気館事前検討準備会」の場が持たれた。2017年2月22日(水)には、松本電気館の運営を市民の有志から譲渡され、「オリオン座」、「松本東映」と改名、改築し管理を行ってきた平形興行の平形氏から話を聞く旧松本電気館の歴史を学ぶ会を行った。3月2日(木)に埼玉県深谷市で酒蔵を改築した深谷シネマの運営に携わっている「NPOま

ち遣し深谷」、3月3日(金)埼玉県川越市「NPO法人川越蔵の会」の取り組みを学ぶ視察研修に、松本大学教員、松本大学生、上土商店街関係者、松本市役所職員、松本市地域づくりインターン総勢43名が参加した。3月10日(金)には松本大学教員、学生、上土商店街関係者、松本市職員、松本市地域づくりインターン総勢13名で長野県飯田市を訪れ、飯田市役所都市開発部長として市の開発に携わった糸原氏に松本電気館保存の際における行政への働きかけの方法を中心に話を聞いた。

3月2日・3日の視察研修に参加をしたカフェあげつちボランティアスタッフの一人である70代の女性は、それまで松本電気館の取り組みに関わることがなかったが、松本電気館の保存と再生に向け、視察の学びから今後どのような発展が望めるかカフェあげつちを訪れる地域住民と日々の運営の中で語るようになった。また、視察研修から戻った検討準備会に参加する地域住民は、自ら松本大学教員、松本大学生、松本市役所職員、地域づくりインターンと今後の松本電気館の保存と再生に向け3月22日(水)に決起集会を催した。

このように、長年の地域住民の地域づくりの働きかけや、居場所づくりを核とした「カフェあげつち」の開設や勉強会を通じ、日々の取り組みの中から地域住民自身が松本電気館の保存と再生への雰囲気盛り上がり、地域と大学や市の連携によって新たな地域づくりの動きが始まった。

3. 文献研究

ここでは、2. 事例研究2-2 エスノグラフィに記載をしたカフェあげつちおよび中央地区での取り組みをもとに文献研究を行う。今回は、レイ・オルデンバーグ著 忠平美幸訳/マイク・モラスキー解説『サードプレイスコミュニティの核になるとびきり居心地よい場所』を参考文献とする。3分類した10事例ごとに参考文献からそれぞれの事例に当てはまる内容を引用または抜粋する。そのうえで、4. 考察においてデータ分析、エスノグラフィ、文献研究を総合して考察を行うこととする。

以下は、カフェあげつちおよび中央地区での10事例を3種類の目的別に、『サードプレイスコミュニティの核になるとびきり居心地よい場所』から当てはまる文章を抜粋および引用したものである。

1) そこに住む人々がホッとできる空間や人とな

がる空間の事例

①カフェでお茶を飲むことに関する事例：2015年度に達成

ケース1：日常生活の中で課題を解決

サードプレイスは、年配者のためにもなる。(略)
サードプレイスは一般に商売の場であり、客の少ない時間帯には退職者から利益を得ている。ほかの人びとが職場や学校にいるときに、彼らがボックス席やいすを埋めてくれるのだから。それに、退職者のほうが総じて社交的に世慣れている。もはや生活のためにあくせく働くこともない彼らは、楽しい会話や、人びととの交際そのものの愉しみに、より大きな価値を置くようになっている。(略)

サードプレイスは、退職した人びとが現役の人びとと接触を保つ手段や、うまくすれば、いちばん古い世代がいちばん若い世代と交流する手段を提供する。

高齢者と年金生活者全般の悲惨な状況は、サードプレイスのもう一つの機能を浮き彫りにするが、それはあらゆる「互助会」で実践されていることだ。サードプレイスの友好的な雰囲気の中、人びとは知り合い、互いに好感を抱き、やがて互いの世話をするようになる。互いの世話をするとき、人々は自分たちの福祉というものに関心を持つ。そしてこれは、政府のプログラムで得られる福祉よりはるかに優れたかたちといえる。互いの合意と、心からの共感、人びとの状況にたいする本当の理解にもとづいているのだ。「対象者」(ケース)など一人もいない。

ケース2：常連客であることが何よりも意味を持つ

サードプレイスの常連は、血縁者や旧友にそうするように、「お互いのためになることをする」。もういらなくなったものをあげる。まだ必要なものは貸す。「仲間の一人」が苦難に見舞われたら、それを和らげるために自分のできることをする。誰かが二日ばかり「姿を見せ」なければ、誰かが様子を見に行く。

②教室に参加することによる事例：2015年度に達成

ケース3：教室の開催により多くの地域住民が訪れる居場所になった事例

サードプレイスの機能についてこうして長々と羅列するなかで、指摘したほうがいいと思われるのは、この種の帰属意識を求める根本的な動機が、個人の利益にあるわけでも、市民としての義務にあるわ

けでもないということだ。人がサードプレイスに何度でも戻ってきたくなる基本的な動機は楽しさである。(25項より)

サードプレイスの「楽しい」機能は、おそらく、娯楽の機能として理解したほうがいい。(略) サードプレイスでは、そこにいる人びと自身が娯楽の提供者だ。その娯楽を支える活動は会話であり、情熱的だったり呑気だったり、深刻だったり機知に富んでいたりと、有益だったりくだらなかつたりと、様々だ。そんなやりとりをしているうちに、顔見知りが人格をもち、人格が真の個性になる—世界中でたった一つの、そしてそれぞれが、私たちの生活に豊かさを増す個性になる。(25項より)

2) 地域課題を踏まえて生活を支える拠点の事例

①買い物支援事業や雪かきを通じて生活を支援

あった取り組み：2015年度から2016年実施

ケース4：買い物支援事業を通して生まれた地域住民と学生の関わりの事例

融合は、サードプレイスによく適した機能の一つである。サードプレイスは、来訪者の「通関手続き地」の役割を担い、新入りが古株の多くに引き合わせてもらえる場所としての役に立つ。(中略) サードプレイスという「中立の領域」(接待者の役割も客の役割も引き受けずにすむ空間)は、コミュニティ・ライフにきわめて重要な、とびきりのつきあいやすさを提供する。誰でも好きなときに来て好きなときに帰ればいいし、誰の世話にもならない。そしてしまいには近所に住む人全員を、じかに会うか噂に聞くかして、知ることになる。(18~19項より)

この点で、サードプレイスは「仕分け場」の役目も果たす。サードプレイスで幅広い交流が可能になることは、最終的に「ソシオメトリー」の問題につながる。すなわち人は、自分がある特定の人びとをものすごく気に入っていて、他の人びとを嫌っているということに気づく。自分と興味が似ている人を見つけたり、自分とは興味の在り方が違うけれど気になる人を見つけたりする。サードプレイスは、最初に人を呼び集めるうえで役に立つことが多く、こうして集まった人々のなかから、のちに別のかたちの付き合いが生まれるのだらう。(19項より)

ケース5：雪かきを通じて地域住民の生活を支援した事例

これと関連するのが、中立準備地としてのサード

プレイスの機能だ。地元が危機におちいると、概して人びとは、自治体の書記官に支援をあおぐのと同様もしくはそれ以上に、自分たちでどうにか切り抜けることが必要だと気づく。暴風雨などの危機のときには、助け合うために地元の市民を動員しなければならないことがままある。だが、どこに？先ごろフロリダ州南部を襲ったハリケーン「アンドリュー」の直後、多くの人々は、被害の深刻さと広がりに関する情報や、どんな対策が取られているかの情報を得るため、あるいはどうしたら協力したり援助を求めたりできるかを知るために、他の人びとと集まる必要があると感じながら、破壊現場から出てきたのだったが、ほとんどの場合、集まる場所がどこにもなかった。念入りの用途別区画のせいで、こうした人々は自前の「サードプレイス」を設けることが認められていなかったのだ。(20項より)

①公民館事業「ふれあい健康教室」「居酒屋公民館」にまつわる事例：2016年度実施

ケース6：地域住民が公民館事業を通し自ら新たな居場所づくりに取り組んだ事例

サードプレイスは執務室（オフィス）の代わりになりうる。(略) 一部の人びとは、行きつけのサードプレイスにいる時が最も「居場所を特定しやすい」。そこは彼らが毎日確実に訪れる唯一の場所であり、その結果「つかまえる」には最適な場所なのである。私たちの多くが、引退した教官たちと接触を保っている場合は、キャンパスではなく、双方が訪れるこうしたサードプレイスである。「執務室」としてのサードプレイスは、(略) 当事者間の平等を実現するためというただそれだけの理由だとしても、この慣行は推奨すべきだ。(30～31項より)

②「まちなかギャラリー」に関する事例：2016年実施

ケース7：「まちなかギャラリー」の実施により上土から中央地区へと広がった取り組みの事例

本当のコミュニティには、集団で成し遂げる事柄がある。個人のみではできないことをするために、人は協働し協力する。この種の努力はほとんどが非公式なものだが、にもかかわらずそれには誰に何ができるかをめぐり、近隣住民の技能と能力と態度に関する全般的な理解が必要である。サードプレイスは、共同作業で役立ちそうな能力にもとづいて人々を仕分けするうえで役立つ。(19～20項

より)

③まちづくりのきっかけとなる場の事例

①カフェボランティアに関する事例

ケース8：地域住民がカフェボランティアからまちづくりへ参画した事例

サードプレイスの一番大切な機能は、近隣住民を団結させる機能だ。(中略) このような場所は、事実上あらゆる人が利用するので、時期に、誰もがみんな知り合いであるような雰囲気生まれる。

(中略) 重要なのは、あらゆる人を知っていることであり、そのみんなが福祉全般にどれほど多様なものを足し引きしているかを知ることであり、様々な問題や危機に直面したとき彼らにどんな感情をいただいているかにかかわらず、近隣に住む誰とでも仲良くやってくすべを身につけることである。サードプレイスはいわば「ミキサー」なのだ。(18項より)

①「水と緑の憩いの空間ワークショップ」にまつわる事例

ケース9：「カフェあげつち」運営から地域づくりへの意欲

サードプレイスは、ジェyson・ジェイコブズが「顔役」(パブリックキャラクター)と呼び人びとも供給する。すなわち、近所のあらゆる人を知っていて、近所のことを気にかけている人物のことだ。たいていは、その境界の出来事に「目を光らせ」ている商店主か経営者。彼らは、子供たちがときおりどんな悪事に「足を踏み入れ」ているかを親に警告し、警察の厄介にならないようにする。また、新参もにその地域で初めて歓迎の挨拶をするのも彼らだろう。

②松本電気館への関わり

ケース10：旧松本電気館を中心とした新たな住民主体の地域づくりの動き始動

サードプレイスは、政治討議の場として非常に重要である。(略) サードプレイスは、知的討論の場としての役割も担っている。サードプレイスで議論される重要な主題は、政治だけではない。哲学、地理学、都市開発、心理学、歴史などさまざまな話題が狙上に載せられる。誰もがそこそこの知識人であり、サードプレイスの常連が大方の人より知的なのは、批判者たちの前で自分の考えを披露するからだ。(28～29項より)

4. 考察

ここでは、2実践研究における1) データ分析、2) エスノグラフィからカフェあげつちでの居場所づくりからどのようなことが考えられるかそれぞれの事例を基に考察することとする。

4-1 商店街の居場所づくりにおける考察

1) そこに住む人々がホッとできる空間や人となつがる空間の事例

データ分析1) より2015年度においては平均16名、2016年度においては平均20人がカフェあげつちを訪れている。またエスノグラフィ1、2の事例より近隣住民を中心に常連の客が来るようになり、その中で生活における課題を解決するなど、住民が習慣として訪れることのできる空間を提供することにより、そこに訪れる人々に関わりを持つことのできるような関係が生まれたことが分かる。

そしてデータ分析1) およびエスノグラフィ3の事例から分かるように2015年度は合計20回、2016年度には合計34回の教室の実施により、喫茶の営業中には訪れない近隣住民が訪れることのできる空間の提供を進めたことにより、日常生活および喫茶運営では生まれなかった近隣住民同士の関わりが生まれたことが分かる。

このことから2015年および2016年においてカフェあげつちの運営を行ったことにより、そこに住む住民がほっと過ごすことのできる空間が提供され、人とつながる空間が生まれたことが考えられる。

2) 地域課題を踏まえて生活を支える拠点の事例

データ分析2) より2015年度は買い物支援事業を30回、2016年度は23回行ったことが分かる。またエスノグラフィケース4からは買い物難民となった地域住民に対し学生が買い物支援事業を行ったことで、地域住民と学生の関わりにより新たな人間関係が形成された。そのことにより、データ分析2) およびエスノグラフィケース5から分かるように2015年に1回、2016年に2回松本大学生が行った雪かきで、買い物支援事業を通して地域住民と学生が形成した地域においての人間関係を基盤とし、生活において抱える雪かきという課題を学生が解決した。

また、データ分析2) およびエスノグラフィケース6に記載されている居酒屋公民館の事例から分かる通り、上土に公民館事業を通してカフェあげつち以外の場所で居酒屋公民館という新たな居場所づく

りが進められた。

そして、データ分析2-1およびエスノグラフィケース7に記載した中央地区のふれあい祭りでもちなかギャラリーを実施したことにより、上土町内だけでなく中央地区全体の地域住民に展示品の収集を呼び掛け公民館に展示を行ったことにより、カフェあげつちの運営だけでは関わることのできない地域住民との関わりが生まれた。このことからちなかギャラリーの実施で中央地区全体の地域住民と関わりを持ったことにより、居場所づくりの取り組みが上土町会および上土商店街振興組合の地域住民を中心に限定されていたが、対象者が中央地区全体の地域住民を中心としたものへと広がった。

このことから2015年度および2016年度においての買い物支援事業および雪かきといった取り組みから地域住民との人間関係を形成したことを基盤に、2016年度において公民館事業との関わりからカフェあげつち以外の場所においても新たな居場所づくりが進められた。このことから様々な取り組みを通して公式、非公式にお互いを支えあうネットワークが生み出され、地域課題を互いに生活を支える拠点がつくられたことが考えられる。

3) まちづくりのきっかけとなる場の事例

データ分析3) エスノグラフィケース8から地域ボランティアのカフェあげつち運営への関わりが始まったことにより、それに付随した上土や中央地区の地区行事、運営への関わりが広がり始めたことが分かる。

エスノグラフィケース9の水と緑の憩いのワークショップへの参加により、普段の下町会館カフェあげつちの運営を通じて今後の下町会館やお城下町のまちづくりを考えるきっかけが設けられた。こうした振り返りの機会が地域住民の地域づくりに対する継続的な意識向上につながった。

エスノグラフィケース10の松本電気館保存と再生プロジェクトは、これまでの地域住民による長年の地域づくりの取り組み、そして行政や松本大学との関わりにより、地域においての各立場の役割についての長所を集約したことで、ようやく前進し始めた。これは、カフェあげつちの常設開設により地域住民、行政、松本大学の様々な人々が日常的に一つの場に集うことで人間関係が形成されたことにより、個人個人の意志が日常生活の中で一本化されたことが、地域において多数の人々の意見を集約できた要因だと考えられる。

以上のことから、日常的なカフェあげつちの運営からカフェあげつちのボランティア運営の参加、水と緑の憩いのワークショップへの参加により、地域住民との人間関係のつながりを基盤として、日常的に地域行事や運営に参画する人々が現れるようになった。こうした地域住民による長年の取り組みがきっかけとなり、旧松本電気館の保存再生への雰囲気が高まるなど、地域づくりへの動きが始まったことが考えられる。

4-2 住民の主体性について

ここでは4-1商店街の居場所づくりにおける考察を基に、住民の主体性の変化について考えることとする。

1) そこに住む人々がホッとできる空間や人とつながる空間の事例において地域住民は、カフェあげつちの喫茶を日常的に訪れる常連客や、教室に通う生徒といった受け身の地域住民であった。

しかし2) の地域課題を踏まえて生活を支える拠点の事例において、買い物支援事業や雪かきを行った学生を支援しようと指導や食事を提供する地域住民が現れた。また、居酒屋公民館や中央地区ふれあい祭りでのまちなかギャラリーの実施で、中央地区の行事を通して、主体となる人々が生まれた。さらに3) まちづくりのきっかけとなる場の事例において、これまでの取り組みにおいての人間関係の広がりを基盤に、カフェあげつちのボランティアの参加、水と緑の憩いのワークショップへの参加等を通して旧松本電気館の保存と再生へ動き出したように、地域住民自身が主体的に自ら動き始めるという主体性の変化が見られた。

このような地域住民の主体性の変化が生まれた要因として、1) そこに住む人々がホッとできる空間や人とつながる空間の事例や2) 地域課題を踏まえて生活を支える拠点の事例においての地域における取り組みや人間関係が基盤となったからこそ、3) まちづくりのきっかけとなる場の事例での地域住民の主体性が生まれたことが重要であると考えられる。

5. 結論

結論では、2.エスノグラフィのケースごとに3. 文献研究から対応する記載を当てはめる。そのうえで実際にカフェあげつちにおいて実践してきた事例が、サードプレイスという第三の居場所を持つ役割

を果たしているか考える。そのうえで5-1にてサードプレイスである「居場所」の持つ役割である定義を明らかにする。そして5-2で居場所づくりが地域づくりにおいてどのような機能をもたらすかを明らかにし、5-3にて可能性を秘めているか明らかにすることとする。

5-1 居場所の役割の定義

ここでは、エスノグラフィおよび文献研究における各事例を対比したうえで、事例ごとに居場所の役割における定義を明らかにする。

1) そこに住む人々がホッとできる空間や人とつながる空間の事例

①日常生活の課題解決

エスノグラフィケース1のAさんは、日常生活に課題を抱えているが、カフェあげつちに足を運ぶことにより、新たな人間関係を形成した。そして、毎日会話をする中で生活における不安をカフェあげつちのスタッフに話をする。そのことにより、Aさんが抱えている生活における具体的な課題をカフェあげつちに勤務するスタッフが明確に把握することができる。そのうえで、心の抱える不安を会話の中で取り除くことや、課題を解決するためにスタッフが協力し、解決に導いた。

文献研究ケース1より年配者のためになるサードプレイスは、商売という形により不特定多数の誰もが足を踏み入れることができるという利点を持つことで、新たな人間関係を形成することができる。それにより、課題を解決するためにより多様な策を持った人々が関わりを持つことができる。これにより多くの人々に対して、互助会のような形をとり、政府が実施することのできない解決策を講じやすくなる。

このように、日常生活の課題を抱えた不特定多数の年配者がサードプレイスに日足を運ぶことにより、新たな人間関係を形成することで、政府の制度だけではないより多様な解決方法を生み出し、講ずることが居場所役割である。

②苦難を互いに助け合う関係を生み出す役割

エスノグラフィケース2のようにカフェあげつちにほぼ毎日顔を出すBさんが、怪我を負ったことにより顔を出さなくなった。そのことにより、地域住民は心配をするようになる。

このように、文献研究ケース2よりサードプレイス

という居場所に関わる人が苦難に見舞われたときに、そこに関わる他者が助ける。そしてまた別の誰かが困っているときにBさんが助けるというように、これは連鎖のように続く。

これはサードプレイスという居場所の存在により、目に見えない組織のようなものを形成し、誰かが苦難に見舞われたときに互いに人々を助け合う関係が生まれる。それは、サードプレイスという誰もが関わりに加わることでできるという利点を生かし、拡大をすることも可能だ。居場所は人々の苦難を互いに助け合う関係を生み出す役割を担っている。

③ 娯楽の提供から人々との関わりを持ちたいという意思の提供

ケース3: 教室の開催により多くの地域住民が訪れる居場所になった事例

エスノグラフィケース3のように、カフェあげつちにおいて教室を開催したことによりカフェあげつちの喫茶運営だけでは関わることのできない地域住民が訪れ、普段関わることのできない住民同士の関わりが生まれた。

文献研究ケース3より教室の開催でカフェあげつちという場が楽しさを生み出す娯楽の提供の場になったことで、義務でなく多数の地域住民が訪れたいという意思を持ち互いの会話を通して関わりを持った。

このように、サードプレイスである居場所は、様々な企画が行われることで娯楽が生み出されることにより、人々が自ら他者との関わりを持ちたいという意思の提供という役割を担っている。

2) 地域課題を踏まえて生活を支える拠点の事例

① 新たな人間関係の構築基地と非常時の課題解決拠点基地

エスノグラフィケース4から分かるように、買い物支援事業を通し野菜を販売する学生と地域住民の関わりが生まれた。

文献研究ケース4にサードプレイスは、来訪者の「通関手続き地」の役割を担い、新入りが古株の多くに引き合わせてもらえる場所としての役に立つとある。これに当てはめて考えた場合、来訪者である新入りの学生が地域住民である古株に野菜販売という「通関手続き地」で引き合わせてもらい、関係を築いた。また、「仕分け場」の役割を果たすサードプレイスで、野菜販売を通じて知り合った学生と地域住民は、次第にお互い付き合いやすい相

手を見つけ、付き合うようになる。

サードプレイスである居場所は、新たに関わりを持ちたいという人々がそこに長年住む人々との関わりを持つ場であり、新たな人間関係を築く場という役割を担っている。

また、エスノグラフィケース5の事例のように学生が雪かきを行ったが、文献研究ケース5から分かるように、中立準備地としてのサードプレイスでは、生活課題を解決せねばならない状況に陥った際に、日常生活の中から人々の集まる居場所ができていれば、非常時に何か課題が起きた際にもそこにいつものように人々が集まり、課題を支えあつてそこに住む住民が自ら解決策を講じることができる。

このようにサードプレイスである居場所は、日常の人間関係が基盤となり、非常時の課題を地域住民同士で支えあい解決する役割を担っている。

② 地域づくりにおいて重要な意思決定の会議場

エスノグラフィケース6ふれあい健康教室や居酒屋公民館といった公民館事業を通して普段カフェあげつちを訪れない地域住民と関わることのできる環境と関係が生まれた。

文献研究ケース6のようにサードプレイスは執務室(オフィス)の代わりになりうる。この公民館事業を上土にて実施する際も、事前の打ち合わせ等をカフェあげつちに常駐する地域住民や他の上土の店主へ公民館職員が出向くことによって実現した。

こうした地域行事等を実施する際の意志決定も、日常的に集まることのできるサードプレイスという居場所があるからこそ地域住民とコンタクトを常時取ることができ、継続的に行うことができる。サードプレイスである居場所は、日常的な地域づくりという物事の意味決定において地域住民との重要な意思疎通を図る重要な会議場である。

③ 個人の能力をまとめ事業を成し遂げる場

エスノグラフィケース7の中央地区ふれあい祭りでのまちなかギャラリーの実施により、中央地区全体の地域住民との関わりが広がった。

文献研究ケース7のようにサードプレイスは、共同作業で役立ちそうな能力に基づいて人々を仕分けするうえで役立つとある。

この場合、まちなかギャラリーという江戸から昭和の生活用品を展示品として募集する際に、松本城が中央に位置する中央地区の住民という利点を

生かし、代々家に受け継がれているものがあるのではないかという仮説を立て、個人の力だけではできないことを集団で成し遂げ、協働し協力することにより、複数の住民からの展示品の収集を行うことができた。

このようにサードプレイスである居場所は、コミュニティで一つのことを実施しようとする際に、個人の持つ能力を一つにまとめあわせ事業成し遂げる役割を持つ。

3) まちづくりのきっかけとなる場の事例

①地域づくりの担い手である近隣住民団結の役割

エスノグラフィケース8のようにカフェあげつちの運営にボランティアスタッフとして関わるようになった地域住民が次第にまちづくりに参画するようになった。

文献研究ケース8にサードプレイスの一番大切な機能は、近隣住民を団結させる機能だ。(中略) サードプレイスはいわば「ミキサー」なのだとある。

このように、カフェあげつちという喫茶店の運営を通してボランティアスタッフと顧客である地域住民が日常生活の中で関わりを持つようになる。こうした関係を通して互いを好きか嫌いに関わらず、誰とでも仲良くやってくすべを身に付けることでそれまで結びつくことなかった近隣住民が団結する。このことにより、カフェあげつちの運営だけでなく、地域行事といった担い手が少なくなってしまった行事運営にもカフェあげつちのスタッフとして関わりだした地域住民や顧客たちが地域行事の運営スタッフとして関わり始めるようになる。

サードプレイスという居場所は、地域づくりを行う上で重要な担い手である近隣住民を日常生活の中で団結させる役割を担っている。

②地域づくりにおけるキーマンの存在

エスノグラフィケース9にある水と緑の憩いの空間ワークショップへの参加を通して日常のカフェあげつちの運営を振り返ることにより、今後の地域づくりへの熱意を燃やした。

文献研究ケース9にサードプレイスは、「顔役」(パブリックキャラクター)と呼び人びとも供給するとある。

これをエスノグラフィケース9に当てはめて考えた場合、「顔役」(パブリックキャラクター)である普段下町会館を管理する男性に対して松本市役所から打診があり今回のワークショップへの参加が促

された。そしてこのワークショップに男性が参加したことにより普段関わることのできない他の地域住民と関わりを持つことになる。そしてワークショップの場で、他の地域住民から下町会館に対して様々な運営に対するアイデアが出され、それがきっかけとなり男性はさらに下町会館を中心とした地域づくりに熱意を燃やすようになる。

このように、サードプレイスである居場所には、「顔役」(パブリックキャラクター)と言われるその場所の決定権を持つキーマンが存在する。その人物とサードプレイスにおいて他者が関わりを持つことによって、そのサードプレイスを中心とした地域をどのようにつくっていくべきか互いが刺激を受け、地域づくりが始まっていく。サードプレイスには、地域づくりにおけるキーマンの存在があり、他の地域住民に対して様々な橋渡しを行う場となっている。

③地域づくりにおける政治討議の場としての役割

エスノグラフィケース10のように、これまでの取り組みが基盤となり旧松本電気館の保存再生事業が始動し始めた。

文献研究ケース10にあるようにサードプレイスは、政治討議の場として非常に重要である。(略) サードプレイスは、知的討論の場としての役割も担っているとある。

旧松本電気館保存再生事業という政治的な議論の場として、用いられているのも下町会館カフェあげつちである。上土商店街振興組合理事、上土町会長、松本市役所職員、松本大学教授といった様々な分野の専門家が集まり、事業の展開に向けて議論を行う。これはカフェあげつちや中央地区での日常的な取り組みからできた人間関係が基盤となり、松本電気館保存再生へとそれぞれの意見の一致したことによるものである。

地域づくりにおける政治討議の場としての役割を持つサードプレイスは、今後の地域づくりの方向性を決定づける上において大変重要な意味を持つといえよう。

5-2 地域づくりにおける居場所の役割の持つ機能

ここでは、5-1で明らかにした居場所の役割を基に、居場所の持つ役割が地域づくりにおいてどのような機能をもたらすか考えることとする。

1) そこに住む人々がホッとできる空間や人とな

がる空間の事例

居場所において、お茶を飲みながらゆっくりと過ごしながら日常生活の課題を解決することにより、常連客が姿を見せないなどのときに苦難を互いに助け合う関係が生み出され、教室の開催により娯楽の提供を人々と分かち合うことで人々との関わりを持ちたいという意思が生まれる。こうした出来事を通して居場所をまた訪れたいという気持ちが生まれることで連鎖が発生するが、この時点地域住民は受け身の状態である。

2) 地域課題を踏まえて生活を支える拠点の事例

買い物支援事業を通じて新たな人間関係の構築基地としての役割を果たし、雪かきといった非常時の課題解決拠点基地としての役割を担う。また、ふれあい健康教室や居酒屋公民館といった公民館事業を通じて、地域づくりにおいて重要な意思決定の会議場として利用をする。そして、まちなかギャラリーでは、地域住民の能力をまとめて事業を成し遂げた。次第に地域住民の中から主体となる人々が生まれ始める。

3) まちづくりのきっかけとなる場の事例

カフェあげつち運営のスタッフとしての関わりから地域づくりの担い手として近隣住民が団結し、地域づくりにおけるキーマンを核としながら地域住民が地域づくりへ参画するようになる。そして最終的には、政治討議の場として旧松本電気館の保存再生事業が始動し、地域住民が自ら主体的に地域づくりに動き始めた。

4) まとめ 居場所の役割の持つ機能

以上を踏まえると、居場所の役割が受け身であった地域住民を次第に様々な取り組みを通し、自ら地域づくりに主体的に動き始めるということが読み取れる。

2015年度は単なるカフェあげつちという1点でしかなかった単なる居場所が、2016年度において様々な取り組みを通して地域住民との関わりにおける人間関係や公民館事業を通じての環境の変化において、居場所としての機能が広がったまたは広がる可能性が明らかとなった。

このことから、商店街においての居場所づくりという取り組みを通して様々な住民との関わりの中から受け身であった地域住民が主体となり、自ら地域づくりを行いながら居場所の機能が広がったと

いえる。商店街の居場所づくりを行うことにより、居場所の役割が果たす機能から、住民主体の地域づくりをもたらすことが明らかとなったといえる。

5-3 商店街の居場所の機能がもたらす住民主体の地域づくり

商店街に居場所をもたらしたことにより、ただ単にそこに人々が集まる場ができるというだけでなく、そこから網の目を張るように人間関係や活動範囲が広がり、人々がそのコミュニティにおける事業に関わっていくようになる。その様々な事業の中には良いことばかりでなく、多くの課題が存在する。しかし、その課題を乗り越えるために個人の多彩な能力や技術を集約させ互いに助け合って解決へと導く。それが日常生活における課題であろうと、政治的な大きな課題だろうと、人々は長年生きてきた知恵を使って互いに助け合う。そうした課題を解決し互いに喜びを分かち合った時の温かいぬくもりこそがサードプレイス「居場所」の持つ魅力なのかもしれない。そしてその地域づくりにおける目標を達成したときに得られる達成感こそがまた次の目標に向かう原動力となるのであろう。カフェあげつち、そこは私にとっても大変大切な「居場所」となっている。

6. 今後の課題

6-1 住民の主体性の地域づくりについて

ここでは居場所づくりを進めるうえで住民主体の地域づくりを行うための課題を考えることとする。そのための具体的な項目として、居場所づくりを進めるカフェあげつちの経営的な面と運営方法の2点に絞る。

1) 経営面から考える居場所づくりの目的

カフェあげつちにおいて現段階において一番に挙げられる課題は、店の運営が経営として成り立たないことである。現在は、松本市および松本大学からの補助金等を用い運営を続けている状況だが、継続的に運営を続けるとなるといつまでも補助金を当てにしていくことは難しい状況にある。

そのため現段階において考えなくてはならないことは、カフェあげつちの運営における目的である。たとえ赤字が続いたとしても地域の中に人々が集うことのできる居場所を設け、高齢者の生きがいを生み出し、地域づくりを進めることが目的であるな

らば、現段階において将来性を持って利益を生み出し、店の運営として成り立たせる必要性は少なくなる。しかし、これから自らの将来を考えなくてはならない若者が生活を成り立たせながら、喫茶店の運営を続けなくてはならないとなると、多くの課題が山積する。

このようなカフェあげつちの運営が、現在どんな目的に向かって居場所づくりを進めているのかということをお私達は明らかにしなければならないが、現段階において私自身はカフェあげつちの居場所づくりという運営を通して、住民主体の地域づくりを行うことのできる可能性が明らかになった。そのため、残り1年となった地域づくりインターンの期間において、たとえ私がその場に残ることのできない状況になったとしても、地域住民を主体とし、これまでの活動を含めた居場所づくりが地域において残り、いつまでもこの地域に関わった人が帰ってこられる居場所になることである。そのために私自身の目的をしっかりと持ち、残りの任期も業務にあたる事が求められるだろう。

2) 運営手法

今後住民主体の地域づくりを進めていくうえで課題となることは、どのようなことにおいても運営主体が誰なのか明らかにならないことにより、意思決定が難しくなってしまうことである。これまで、カフェあげつちを含めた居場所づくりを進めるうえで、目的と責任の所在が明らかにならないことで、物事を決定するうえで数え切れないほど暗礁に乗り上げたことがあった。

そのうえで、今後考えなければならないこととして、運営事業の規模が大きくなればなるほど、公の組織を設立することが何よりも大切なこととなる。

目的の明確化と公の組織の設立は地域においてどんな事業を進めるうえでも、先決に考えなくてはならない課題である。

6-2 居場所づくりを進めるうえでの対象者の拡大に向けて

1) 子育て世代、女性、子供、若者の居場所づくり

これまでカフェあげつちを含めた居場所づくりの対象者を、主に高齢者としてきた。しかし、今回参考文献としたサードプレイスの中には、以下のような記載がある。

サードプレイスの機能のなかで最も崇高でありながら、もはやどこでもほとんど実現されなくなったのは、若者と大人を一緒にくつろがせ、楽しませる機能だ。世代間の激しい敵意と誤解、若者と疎遠になって彼らを恐れる大人、若者の間に増えつつある暴力これらをはじめ、若者がらみの問題にはすべて共通の根がある。それは、アメリカ社会において、若者がますます大人から隔離されるようになってきているということだ。

かつて子育てが今より容易だったのは、子供たちを知っていて、見守るだけでなく、いやな顔一つせず周囲で遊ばせてくれた近所の人々に、親が大いに助けられていたからだ。古い世代と若い世代がどんなふうにお互いをからかい、おだて、たしなめ、楽しませたかは、相手からどんな教訓が得られ、どんな手本が示され、どんな地元の人物が称賛されたかと同じように、今やほとんど忘却の彼方にある。

今は家を留守にする母親が多いだけに、家族が近所の他人とひどく弱い結びつきしかないことがいっそう悔やまれる。住宅地のなかに、みんなから必要とされ続けているサードプレイスがまだ残っているとしたら、それは新旧世代が昔と変わらず相互交流を楽しんでいる稀有な場所だ。(サードプレイス引用)

地域においては高齢者の他に、子供、若者、親を含めた働く世代がいる。このような世代も含めた全ての世代を居場所づくりの対象者として設定すると、それぞれの世代が互いに助け合い、互いの良さを共有しながら、互いを高めあうことができる。こうしたより多くの世代を対象とした居場所づくりを地域において進めることで、地域においての課題をよりその場で解決しやすくなる。今後は松本大学生の取り組みも含めたうえで、日常の運営においてもこのような対象者の拡大を考えなくてはならないだろう。

2) 観光客の受け入れ

このように松本の地域住民が心地よく暮らすことのできる環境を整えると同時に、松本を訪れる観光客の居場所づくりも考えなければならない。ここで考える観光客の居場所づくりとして、松本の地域住民の日常と触れ合う観光事業である。

この松本市における新たな観光事業のプランについては、地域づくりインターン主催により2017年度8、9月に松本、日本大学生を対象としたプレ観光

を行ったうえで、行政や旅行者といった民間企業との連携を視野に入れた案を来年度においてまとめることとする。そのうえで国内、総合旅行業務取扱管理者を活用したうえで、これまで日々の地域においての活動において関わりを持った地域住民をコーディネートすることができるよう9、10月に行われる国家試験合格に向け試験準備を進めることとする。

6-3 松本電気館プロジェクトについて

現在、上土町会、上土商店街振興組合、松本大学、松本市の代表者の参加により、旧松本電気館の保存と再生の検討会が進められているが、これまでの居場所づくりを含めた住民主体の地域づくりの最終目標を旧松本電気館の保存と再生に結びつけることで、松本電気館を含めた松本城周辺の地域住民を巻き込んだ住民主体の地域づくりをより多数の人々で行うことができるようになることを考える。したがって旧松本電気館の保存と再生を行うことで、より多数の地域住民を主体とした運営で、住民主体の地域づくりがより多面的に行われることを目標とする。そのため具体案は2017年度5月までに準備会の話し合いの内容を基に作成されることとなっている。

7. 巻末資料

7-1 顧客分析

1) 顧客人数

① 事業運営顧客人数

カフェあげつちを有料で利用した顧客人数

月	喫茶部	駄菓子	合計
4月	271	0	271
5月	280	53	333
6月	256	22	278
7月	262	33	301
8月	151	18	169
9月	33	2	35
10月	74	75	74
11月	114	0	101
12月	104	0	104
1月	134	2	132
2月	119	0	119
3月	123	0	123

② コミュニティスペース利用者数

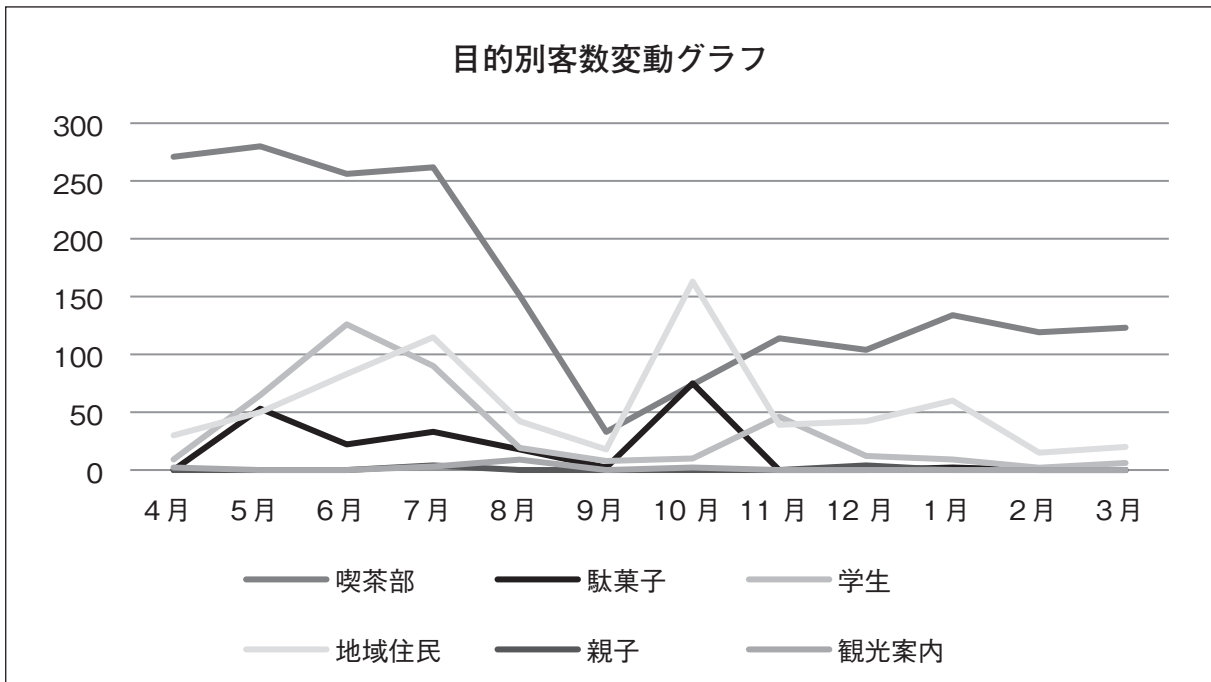
カフェあげつちを無料で利用した人数

月	学生	地域住民	親子	観光案内	合計
4月	9	30	0	2	41
5月	65	50	0	0	128
6月	126	83	0	0	222
7月	90	115	4	3	274
8月	19	42	0	9	70
9月	8	18	0	0	26
10月	10	163	0	2	41
11月	46	39	0	0	80
12月	12	42	4	0	58
1月	9	60	0	0	69
2月	2	15	0	0	17
3月	6	20	0	0	20

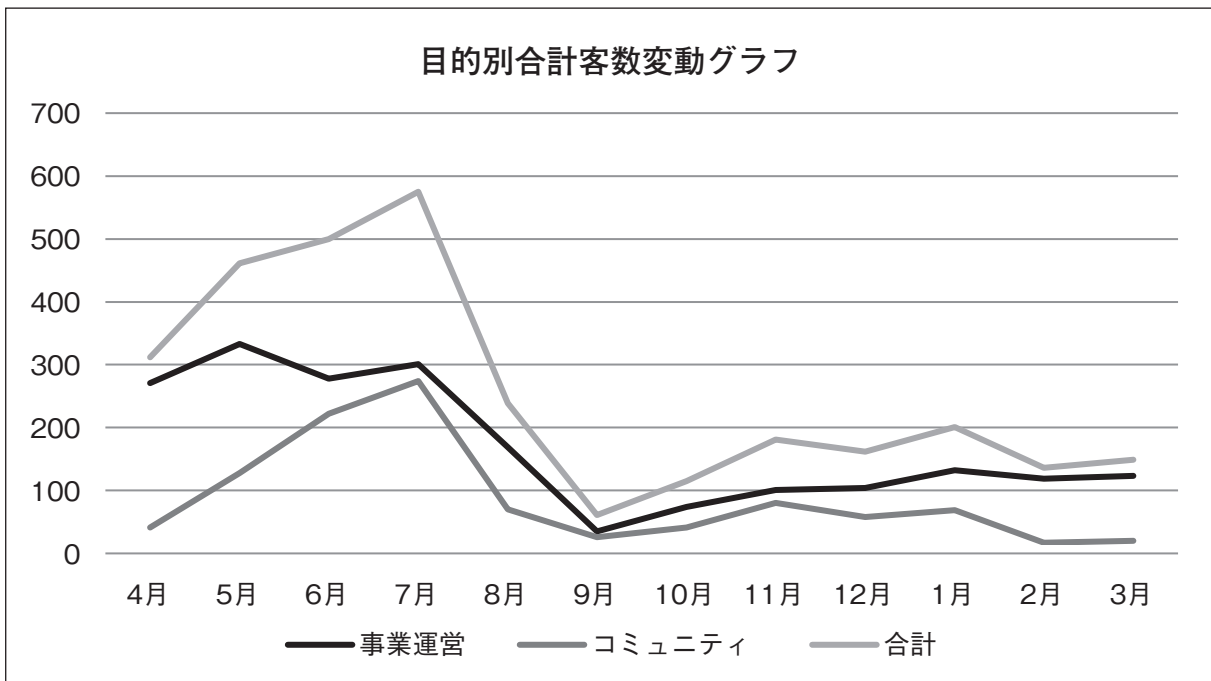
③ 合計利用者数

月	合計
4月	312
5月	461
6月	500
7月	575
8月	239
9月	61
10月	115
11月	181
12月	162
1月	201
2月	136
3月	149
合計	3,092

④カフェあげつち客数変動グラフ



⑤ 目的別客数変動グラフ

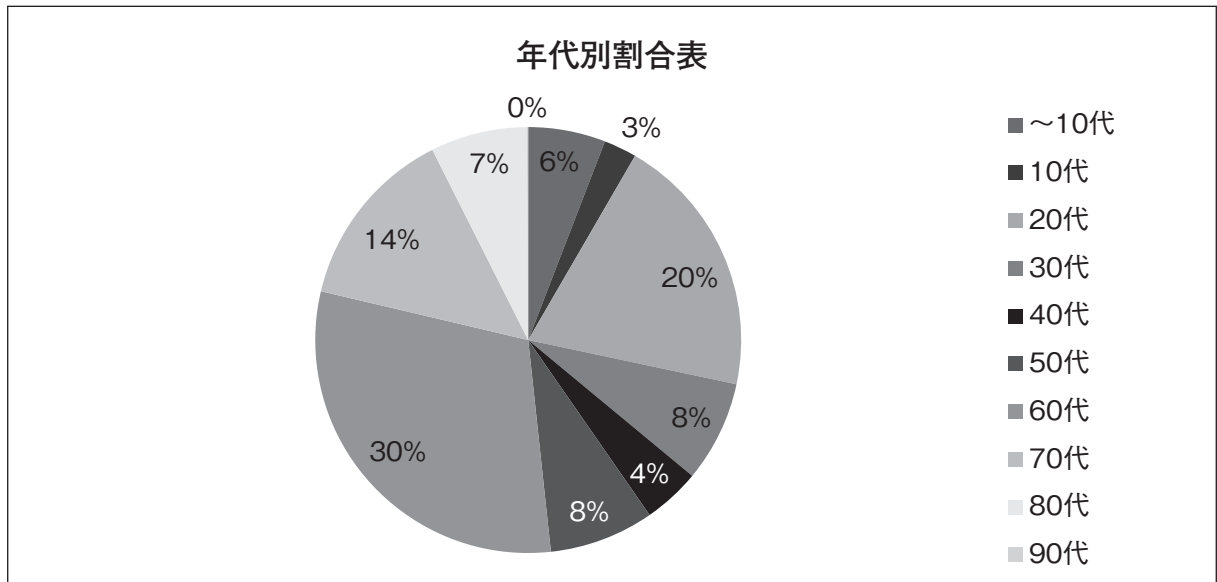


2) 年代別

① 年代別顧客人数

	～10代	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代
4月	27	5	26	29	17	28	81	57	22	0
5月	31	7	82	47	25	52	106	56	28	2
6月	22	30	153	36	23	50	89	61	22	1
7月	35	13	154	45	22	34	148	87	37	0
8月	31	6	32	31	8	18	52	38	12	0
9月	4	1	13	7	2	5	19	7	3	0
10月	1	1	11	4	4	9	52	23	11	0
11月	1	3	49	4	11	12	80	22	14	0
12月	4	5	17	5	4	6	81	18	14	0
1月	8	1	24	8	3	5	102	18	32	0
2月	5	0	14	5	6	10	65	13	16	0
3月	6	0	14	9	6	11	67	24	9	0
合計	175	72	589	239	131	240	942	424	220	3

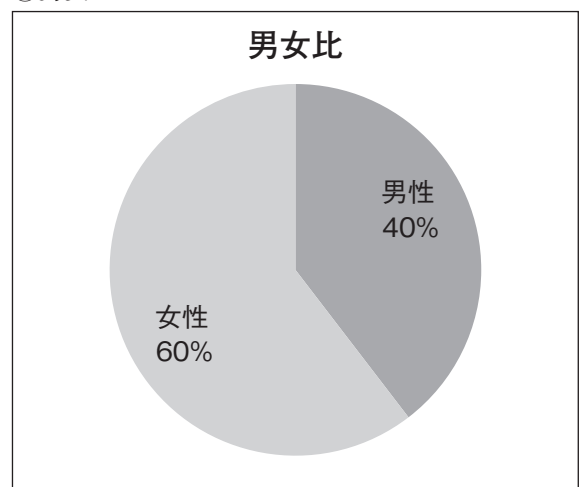
②年代別割合表



①男女別顧客人数

日付	男性	女性
4月	115	197
5月	203	258
6月	193	307
7月	228	347
8月	85	154
9月	31	30
10月	48	67
11月	93	101
12月	57	105
1月	75	118
2月	48	88
3月	50	99
合計	1,226	1,871

②男女比



7-2 2016年度カフェあげつち収支報告書

大正ロマンのまちづくり協議会 カフェあげつち収支決算書

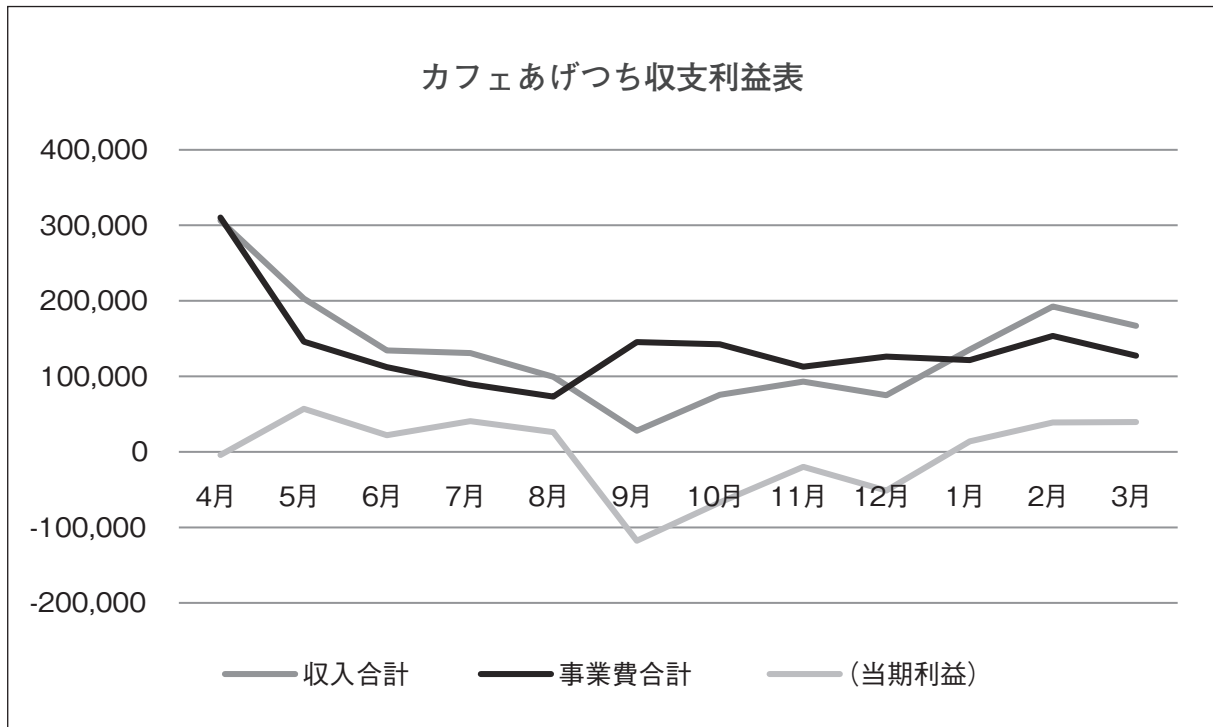
自 平成28年4月1日至 平成29年3月31日

収入の部

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
1. 前期繰越金	272,653	268,715	325,741	347,604	388,492	414,578	296,891	230,065	209,964	158,908	172,834	211,581	251,303
2. 事業収入													
カフェ	67,302	83,553	67,615	64,164	54,867	18,832	25,301	55,465	42,937	56,246	58,120	67,740	662,142
駄菓子	15,345	11,065	7,380	13,510	14,853	1,010	610	2,170	3,690	3,400	5,010	3,190	81,233
回数券	71,580	47,800	44,200	50,020	23,600	6,600	41,600	34,200	25,000	33,690	49,300	48,664	476,254
買い物支援ステーション	152,180	60,305	15,150	2,880	5,980	1,550	0	1,100	3,360	29,820	56,700	32,590	361,615
ぬくもり喫茶むくの木	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8,130	0	8,130
よいまちクラブ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12,364	15,000	15,000	42,364
生坂赤とんぼ祭り	0	0	0	0	0	0	8,140	0	0	0	0	0	8,140
収入合計	306,407	202,723	134,345	130,574	99,300	27,992	75,651	92,935	74,987	135,520	192,260	167,184	1,639,878

支出の部

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
前期繰越金	272,653	268,715	325,741	347,604	388,492	414,578	296,891	230,065	209,964	158,908	172,834	211,581	251,303
2. 事業費													
カフェ	58,008	58,150	46,281	54,697	60,650	5,261	42,399	35,165	51,275	35,953	46,370	47,927	542,136
駄菓子	13,337	0	24,288	5,238	0	0	2,630	3,611	2,592	10,812	0	0	62,508
買い物支援ステーション	134,307	50,881	24,316	3,440	1,800	0	0	0	7,162	31,763	47,079	38,802	339,550
賄い費	10,478	0	0	3,690	1,494	39,281	11,000	14,348	0	3,826	0	0	84,117
消耗品	21,829	7,397	3,956	13,108	7,229	1,396	14,407	3,157	9,851	6,690	4,301	2,948	96,269
維持費	42,386	9,941	13,641	3,711	2,041	99,741	60,041	21,571	23,963	16,550	8,883	17,225	319,694
交際費	0	19,328	0	5,802	0	0	12,000	5,184	1,200	0	14,480	0	57,994
大正ロマンのまちづくり協議会	30,000	0	0	0	0	0	0	30,000	30,000	10,000	10,000	10,000	120,000
ぬくもり喫茶むくの木	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10,400	400	10,800
よいまちクラブ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6,000	12,000	10,160	28,160
事業費合計	310,345	145,697	112,482	89,686	73,214	145,679	142,477	113,036	126,043	121,594	153,513	127,462	1,661,228
(当期利益)	-3,938	57,026	21,863	40,888	26,086	-117,687	-66,826	-20,101	-51,056	3,926	38,747	39,722	-21,350
合計	268,715	325,741	347,604	388,492	414,578	296,891	230,065	209,964	158,908	172,834	211,581	251,303	229,953



7-3 カフェあげつち営業日数

営業日数

	地域ボランティア	常駐スタッフ	休業
4月	10	20	0
5月	14	17	0
6月	11	17	2
7月	12	19	0
8月	21	10	0
9月	4	3	24
10月	3	5	23
11月	18	12	0
12月	18	13	0
1月	19	12	0
2月	14	14	0
3月	18	13	0
合計	162	155	49

7-4 写真資料

1) そこに住む人々がホッとできる空間や人とつながる空間や人とつながる事例

①喫茶運営



②駄菓子屋ロマン館



③教室運営



2) 地域課題を踏まえて生活を支える拠点の事例

①買い物支援事業



②雪かき



③居酒屋公民館in上土



④まちなかギャラリー



3) まちづくりのきっかけとなる場の事例

①カフェボランティア運営の様子



②水と緑を考える憩いのワークショップ



③ 松本電気館保存再生事前検討準備会



7-5 参考文献

- 1) レイ・オルデンバーグ著 忠平美幸訳/マイク・モラスキー解説
『サードプレイス—コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』みすず書房